

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」2021年度開講科目

(授業形態や教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

□必修科目

文学部04210031

教授 堀江 宗正ほか「死生学概論」(死生学の射程) 2単位 A1+A2 金3 オンライン

死生学に関連する研究をおこなっている文学部・人文社会系研究科の教員を中心に、死生学の主なトピックを取り上げて、現在の研究状況を概説する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生をめぐる諸問題、またそれらに関する思想や実践を取り上げる。死生に関する多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。なお、本講義は「応用倫理概論」と共に、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

- 第1回 堀江宗正 死生学とは何か
- 第2回 池澤 優 死生学と宗教
- 第3回 下田正弘 仏教の死生観
- 第4回 高木和子 源氏物語と無常観
- 第5回 高野 明 大学生の自殺防止
- 第6回 早川正祐 ケアの死生学—病苦の語りとケア
- 第7回 鈴木晃仁 死と生と蠟模型
- 第8回 会田薫子 移植医療の死生学
- 第9回 長井伸仁 近代フランスにおける革命と身体的犠牲
- 第10回 吉田 寛 ゲームにとっての死
- 第11回 赤川 学 人口減少社会を生きる
- 第12回 小松美彦 反延命主義の歴史的現在
- 第13回 堀江宗正 他者の死から自己の死へ

文学部04210061

教授 鈴木 晃仁・池澤 優ほか「応用倫理概論」(応用倫理入門) 2単位 S1+S2 金3 オンライン

科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にし、膨大な情報をもたらし、寿命を延ばすに従い、これまでは考えられもしなかった様々な問題が生まれてきた。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか。いま現在生きている人間たちだけの経済や効率を技術的に優先させた合理性は、はたしてまだ存在しない次の世代に、理不尽な負担を押しつけることにならないのか。そうした哲学的・思想的であると同時に実践的・現実的な諸問題を根本から問い直すべく、生命倫理、環境倫理、技術倫理、情報倫理、さらには世代間倫理といった、いわゆる「応用倫理」といわれる新しい学問領域が、いま強く求められてきている。本講義は、その分野に関する俯瞰的な概説を行うものである。

応用倫理は、本来的に幅広い分野を包含し、多様な方法論を必要とする分野であるため、本年度は生命倫理、臨床倫理、現代倫理、研究倫理、戦争、環境倫理、世代間倫理の順で講じていく。担当講師と講義内容は以下の通りである。

- 第1回 池澤 優 ガイダンス
- 第2回 鈴木晃仁 生命倫理1
- 第3回 鈴木晃仁 生命倫理2
- 第4回 鈴木晃仁 生命倫理3

- 第5回 会田薫子 臨床倫理
- 第6回 小島 毅 現代倫理—尊厳概念
- 第7回 出口 剛 現代倫理—エーリッヒ・フロム
- 第8回 池澤 優 戦争と倫理
- 第9回 池澤 優 研究倫理
- 第10回 福永真弓 環境倫理1
- 第11回 福永真弓 環境倫理2
- 第12回 堀江宗正 世代間倫理
- 第13回 池澤 優 まとめ

本講義は「死生学概論」とならび、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

□選択必修科目

文学部04210051

特任准教授 早川 正祐「死生学演習Ⅰ」（病いの語りをめぐる倫理） 2単位 S1+S2 水2 オンライン

人間は、病いととも生きていくことを余儀なくされたとき、これまで自明視していた人生の意味を深く問い直すようになる。このような意味の問い直しの過程で、当事者が語るということや他者がそれを聞き届けるということは、極めて重要な役割をもっている。しかしながら、ここで注意すべきは、病いの苦しみを語ることやそれを聞き届けることが、多くの場合、困難に満ちたものになるという点である。それゆえ、その困難さを念頭に置きつつ、病いをめぐる体験とその意味について考察することが求められる。

そこで本演習では、病いに関する物語論の古典であるアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』= Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics* を講読する（訳本でも可）ことで、病いの語りがどのような複雑な意味と効果をもつのかをその社会的含意も含めて考えていく。より具体的には、病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語りがどのようなものであるのか、また相互にどのような関係にあるのかを考察する。それと同時に、コミュニケーション・身体・脆さ（vulnerability）・傾聴・証言・苦しみ・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。とりわけ、ポジティブな回復の語りをはらむネガティブな性格や、私たちの身体や生産性重視の社会がはらむ閉鎖的・排他的な側面等を批判的に見ていく。そのことを通して、従来の臨床倫理では見落とされている、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方、またコミュニケーションのあり方を根本的に考察する。

文学部04210052

教授 堀江 宗正「死生学演習Ⅱ」（パンデミックの死生学） 2単位 S1+S2 水2 オンライン

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）は社会のあり方を変えただけでなく、死生学がこれまで十分に考えてこなかった感染症の問題をどのように考えるかという課題を多方面で突きつけている。生命を脅かすリスクの管理（リスク・コミュニケーション、情報隠蔽、否認、排除・差別、将来の予測）、孤独・孤立、自殺、命の選別・選択、良い死・悪い死、葬儀、悲嘆・服喪、過去の感染症の歴史の理解、感染症の文学・思想などである。こうした現在進行中の問題について、死生学はどのように応答できるだろうか。また死生学を未知のリスクに対して応答可能とすべく、どのように再構築することができるだろうか。死生学・応用倫理センターがおこなった「新型コロナウイルス感染症に関する死生観調査」のデータをもとに、受講生と一緒に

に考えていきたい。

文学部04210053

教授 鈴木 晃仁「死生学演習Ⅲ」（症例誌の歴史的な形成） 2単位 S1+S2 金2 オンライン
古代から20世紀までの症例誌の形成に関する優れた研究書・論文を読む。一人の学生が発表、授業では議論、すべての学生はそれを理解して要約を書く。言語は英語であるが、日本語の利用も認める。毎週の正確なレポートと、授業での創造的な議論が成績評価のもとになる。最初の授業で一覧表とファイルをわたす。

文学部04210081

特任教授 会田 薫子「応用倫理演習Ⅰ」（質的研究法） 2単位 S1+S2 火5 オンライン
社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、保健・医療・福祉また社会学・心理学分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようになり、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

文学部04210082

教授 鈴木 晃仁「応用倫理演習Ⅱ」（症例誌の歴史的な形成） 2単位 A1+A2 火2 オンライン
ジョヴァンニ・バティスタ・モルガーニという18世紀の大学教授の症例誌（英語）を読む。一人の学生が発表、授業では議論を行い、すべての学生はそれを理解して要約を書く。言語は英語であるが、日本語の利用も認める。毎週の正確なレポートと、授業での創造的な議論が成績評価のもとになる。最初の授業で一覧表とファイルをわたす。

文学部04210083

教授 堀江 宗正「応用倫理演習Ⅲ」（未来倫理の探求） 2単位 A1+A2 水2 オンライン
この演習は、未来倫理に関する文献を読み、現代社会への応用について議論することを目標とする。今年度は、Joerg Chet Tremmel, *A Theory of Intergenerational Justice*を読む。現在世代が未来世代に負う「世代間正義」についての理論面での理解を深め、未来世代の存続のために、われわれがどのような生き方をするのが望ましいのかを考えていきたい。

□選択科目

文学部04210041

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅰ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅰ） 2単位 S1+S2 水6 オンライン

臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、本学内外の研究者の研究発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として一般に公開しており、医療・介護関係者が多数参加している。

演者およびテーマや授業運営についてメールで知らせるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせ、発表予定のテーマに関し、できれば予習した上で授業に参加することが望ましい。

本研究会では、思想系の学者の講演および医療・介護現場の実践者ないし現場に臨む研究者の講演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

S期は5回の研究会と各翌週にディスカッションを行う。研究会もディスカッションもZoomにて行う。ディスカッションの回は、履修者のレポートの発表と討論を主体として進める。2021年度S学期の予定は以下のとおり。

4月14日 オリエンテーション

4月21日 森下直貴「『生きるに値しない命』とは誰のことか」(仮)

4月28日 前回のテーマに関するディスカッション

5月12日 竹内整一「『自粛』について考える」(仮)

5月19日 前回のテーマに関するディスカッション

5月26日 曾我賢彦「口腔医学が拓げる医療の幅ー臨床死生学・倫理学との接点」

6月2日 前回のテーマに関するディスカッション

6月9日 市原美穂「ホームホスピス宮崎の実践と展開」(仮)

6月16日 前回のテーマに関するディスカッション

6月23日 広井良典「未定」

7月7日 前回のテーマに関するディスカッション

文学部04210042

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅱ」(臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ) 2単位 A1+A2 水
6 オンライン

臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、本学内外の研究者の研究発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として一般に公開しており、医療・介護関係者が多数参加している。

本研究会では、医療・介護現場の実践者ないし現場に臨む研究者に発表して頂くとともに、思想系の研究者にも講演していただき、現代社会における実際の課題について理解し、広い視野で考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

発表予定のテーマに関し、できれば予習した上で授業に参加することが望ましい。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加すること。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

文学部04210043

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅲ」(臨床老年死生学入門) 2単位 A1+A2 木3 オンライン

超高齢社会において臨床死生学と生命倫理学・臨床倫理学が交差する領域における諸課題の理解と思索をめざす。予定トピック：超高齢社会の医療とケアに関わる諸問題(人口動態、加齢のプロセスに関わる臨床的な諸問題、医療と介護の制度、End-of-Life Care (EOLC) の概念、EOLCと緩和ケアとその心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、延命医療の差し控えおよび終了に関わる問題、「尊厳死」・安楽死・医師による自殺ほう助、脳死、臓器移植など)

文学部04210044

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義Ⅳ」(ケアの倫理) 2単位 S1+S2 木3 オンライン

臨床や教育、また日常の至る場面において、ケアの重要性が盛んに指摘されている。にもかかわらず、その内実は十分には吟味されていない。こういった現状を踏まえ、現代倫理の鍵概念となった「ケア」について、その複雑さと困難さを尊重する仕方で、批判的に考察していきたい。

より具体的には、英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理 (Ethics of Care) においてケア、またそれらの概念と不可分な、ニーズ・応答責任 (responsibility) ・脆弱性 (vulnerability) ・依存性 (dependency) ・受容性 (receptivity) といった概念が、どのようなものとして捉えられてきたのかを検討する。とりわけ、ケアの倫理の代表的な論者であるキャロル・ギリガン、ネル・ノディングズ、エヴァ・キテイの議論を丁寧に見ていくことで、人間の傷つきやすさと依存性を根本に据えるケアの倫理が、主流の倫理学 (もちろん一枚岩ではないが) に対して、どのような独自の貢献をしようのかを考察したい。

文学部04210045

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義V」 (自律についての関係的なアプローチの展開—現代行為論・自由論の一展開) 2単位 S1+S2 木4 オンライン

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」 (relational autonomy) について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的な自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち、自己決定・反省性・合理性・自己理解・統合性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセス (shared decision-making process) に相応しいものへと発展させる。

文学部04210046

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義VI」 (認識をめぐる不正義と責任—現代認識論の一展開) 2単位 A1+A2 水2 オンライン

2010年代以降、英語圏の認識論で盛んに論じられるようになった「認識をめぐる不正義」 (epistemic injustice) の問題と、その不正義を是正する「認識をめぐる責任」 (epistemic responsibility) の問題を考察する。そのことを通じて、「認知する」や「認識する」といった営みに否応なく孕まれている倫理的な次元を、その社会的な含意も踏まえつつ、明らかにする。

哲学の分野においては、認識論と倫理学は別々の領域に属するものとししばしば——「常に」ではないが——見なされてきた。しかしながら、私たちの具体的な生活の場面を考えると、多くの場合、倫理の問題は同時に認識の問題でもある。例えば、疾病・障がい・性別・性的指向等による差別、またレイシズム等においては、認識自体が、力関係によって媒介され、相対的に弱い立場に置かれた者は発言権を奪われ、沈黙を余儀なくされることがある。また勇気をもって窮状を訴えたとしても、それは正当な証言としては見なされず軽視されるかもしれない(「証言をめぐる不正義」)。さらに言えば、そもそも、当事者の苦境にたいして、周囲の人々の関心が低いいため、その苦境を表現する言葉が開発されず、その結果、本人はその苦境を訴える言葉自体を奪われているかもしれない(「解釈をめぐる不正義」)。

本講義では、まず主にフェミニスト認識論(ないし社会的認識論)による「認識をめぐる不正義」論の基本的な発想・概念を概観・検討する。その際、臨床の文脈において、その基本的発想・概念が、どう発展的に捉えられるのかにも触れたい。そのうえで、そういった不正義に対して私たちはどのような責任を負っているのかも批判的に考察する。そこでは同時に、潜在的偏見 (implicit bias) ・故意による無知 (willful ignorance) ・責められるべき無知 (culpable ignorance) に対して、私たちはどのような点で責任を負うのかも検討することになる。

文学部04210047

准教授 乗立 雄輝「死生学特殊講義VII」 (死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの

考察) 2単位 A1+A2 木2 オンライン

死と生をめぐる諸問題に、偶然や確率という事象、概念、およびそれらにまつわる諸理論がどのような関わっているのか、もしくは、関わりうるのかを考察する。

各人にとって自身の生と死は一度きりの事象であり、いずれはみな死に至ることが確実と考えられるにもかかわらず、しかし、ある意味では、そうであるがゆえに、死と生をめぐる私たちの思考には、意識するか否かにかかわらず、確率や偶然(性)にまつわる思考が深く関わっている。

また、人間は、不慮の偶発的事態に起因する不具合や不幸を避けようと長年にわたって努力を積み重ね、その結果、ある程度の成果を挙げてきたが、そのことの副産物として、逆に合理的な思考ができなくなってしまったり、旧来の倫理規範や価値観がゆらぐ事態が現れつつある。

本講義では、生と死の問題について、偶然や確率をめぐる議論がどのようにかわるのかを、様々な哲学者たちの主張に注目しながら考察していくことを試みる。

文学部04210048

非常勤講師 澤井 敦「死生学特殊講義Ⅷ」(死と不安の社会学) 2単位 S1+S2 月2 オンライン

普段あまり考えることはなくても、何かのきっかけから、自分はなぜ生きているのだろうと「生きる意味」を問う瞬間が誰の人生にもあるだろう。そうした問いについて考える時、「生」には「死」という終わりがあるという事実が否応なく私たちに迫ってくる。

とはいえこの死、とりわけ自分の死について、普段あまり考えることはないかもしれない。ただ、あまり考えることがなくても、死という終焉が必ず訪れるという事実は、漠然とした不安感となって、私たちの生をなせば無意識のうちに覆うものとなる。

哲学・心理学・精神医学などにおいて、以上のような事態はさまざまなかたちで考察されてきた。ただ、この授業でとりわけ焦点を当てたいのは、端的に言えば、死や不安の社会的様相である。

死という不可解かつ不可知の現象は社会的にどのように処理されてきたのか・いるのか、また死を基底とする不安感は社会や文化の変動に応じてどのような様相を呈することになるのか。このような問いについて社会理論の観点から考察することがこの授業の目的である。

文学部04210049

教授 古荘 真敬「死生学特殊講義Ⅸ」(死生をめぐる実存哲学の諸問題) 2単位 S1+S2 金4 オンライン

われわれが各自のかけがいのない「この身体」のもとに息づき、自身にとって一回的な生を他者たちと共に生き、年老いて、死んでいく、その多様な実存の様相と意味について、西洋哲学史上のさまざまなテキストを解釈しながら考えていく。扱われるテキストは、必ずしもいわゆる「実存哲学」に分類されるものとはかぎらないが、われわれの実存理解の精緻化をめざした解釈を試みていきたい。

文学部04210071

非常勤講師 轟 孝夫「応用倫理特殊講義Ⅰ」(技術時代の倫理—ハイデガー哲学の視座より) 2単位 A1+A2 木4 オンライン

本講義では、「存在の問い」で知られるドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの思索を手引きとして、現代技術の本質とはいかなるものなのか、またそうした技術によって規定された現代社会において可能な「倫理」とはどのようなものかについての考察を展開する。

講義ではまず、ハイデガーの「存在の問い」の基本的な構造をその時代的な展開に沿って概観する。このことを基盤として、彼の後期の思索における「技術への問い」を検討し、その倫理的

・政治的含意を明らかにする。その際、彼の哲学的思索とナチズムとの関係性にも光が当てられるだろう。講義ではこれらの議論を通して、今日「応用倫理」と呼ばれている営み一般の問題点と限界を浮き彫りにする。

文学部04210072

非常勤講師 吉永 明弘「応用倫理特殊講義Ⅱ」（都市の環境倫理） 2単位 A1+A2 月5 オンライン

環境倫理学の基本的な枠組みを知るとともに、「都市の環境倫理」の内容を理解することによって、環境問題と都市問題について倫理学の視点から考えることができるようになる。

授業計画

- (1) 倫理学からの環境問題へのアプローチについて
- (2) アメリカの環境倫理学：土地倫理、自然の権利、環境プラグマティズム、環境正義
- (3) 日本の環境倫理学：世代間倫理、地球全体主義、ローカルな環境倫理
- (4) アメニティという視点
- (5) 哲学的空間論、人間主義地理学、風土論
- (6) 都市の環境倫理：持続可能性、都市における自然、アメニティ
- (7) 事例研究：清溪川復元、美の条例

文学部04210073

准教授（新領域） 福永 真弓「応用倫理特殊講義Ⅲ」（食と場所の環境倫理） 2単位 A1+A2 火 4 オンライン

人新世時代における自然らしさとは何か、人間的であることとは何かを食と場所に関する議論を通じて考察する。

食とは、自然が生み出したものを人間の身体に取り入れる行為であり、身体という場は人と自然が関わる場でもある。また食は、食料を得て加工し食卓に並べるまでの過程も、食べるという行為自体も、きわめて文化的かつ社会的行為である。しかも、グローバルに広がる食の生産・消費・廃棄のシステムに支えられた現代の食において、わたしたちは見知らぬ他者が生きる場と生産・消費・廃棄のシステムを介してつながっている。本講義では、大気海洋システムまでも大きく人間活動に影響を受け、人為起源の生物系群に地球が覆われた人新世時代において、食システムがいかなる変容を求められ、実際に変容しつつあるかを追いかける。そして、よい食とは何かについて、おいしい、健康である、倫理的である、持続可能である、公正である、真正である、など「よさ」を表現する概念と実践をたどりながら考える。それは同時にわたしたちが生きる場所とは何かについて考えることでもある。本講義は二つの目標を設定する。一つは、現在の食システムを理解した上で、よい食とは何かを評価する軸をみずから見だし、実践する方法を探求することができることである。もう一つは、人新世時代において自然らしさ、人間的であるとは何かについて深く考察し、具体的な社会のデザインについて想像する力を得ることである。

文学部04210074

非常勤講師 村上 靖彦「応用倫理特殊講義Ⅳ」（現象学的な質的研究入門） 2単位 A2 集中 オンライン

現象学的な質的研究は、個別事象の運動を内側から分析するのに適した方法論である。その方法論の概要と実例を示して習熟することを目的とする。方法論の説明を行った後、ナラティブ・メディスンの方法についても説明する。そのあとインタビューの事例分析を行っていく。参加者からの希望があれば、発表もおこむ。事例は、看護師、子育て支援の対人援助職、精神科病院に入院する当事者、子育て支援を受ける当事者など。

文学部04210075

教授 鈴木 晃仁「応用倫理特殊講義V」（患者の歴史と生命倫理学） 2単位 A1+A2 金4 オンライン

古代から現代までの患者の歴史と生命倫理学を教える。古代から現代までの医療において、毎回、個人やグループとしての患者を取り上げて、それを多様な視点から考察をする

文学部04210076

教授 堀江 宗正「応用倫理特殊講義VI」（環境倫理の論点） 2単位 S1+S2 金2 オンライン

環境倫理の論点を、リスク・世代間正義、サステナビリティに関する歴史・理論、環境思想・エコロジー思想の妥当性・必要性に分けて論じてゆく。それを通じて、環境倫理に関わる重要概念についての知識を身につけることを目的とする。

文学部04210077

非常勤講師 北條 勝貴「応用倫理特殊講義VII」（〈亡所〉の環境史／倫理学） 2単位 A1+A2 金2 オンライン

古文書等を紐解くと、時折「亡所」という言葉に出くわすことがある。もともとは、生産能力を失った土地を指す行政用語であったが、やがて、自然災害や権力の抑圧によって消失した土地、人びとの生活の場を意味するようになっていった。しかし、この事象について本当に恐ろしいのは、実体としての場所の〈亡〉ではなく、人びとの個人的な記憶、社会の集会的な記憶における〈亡〉かもしれない。人新世における自然環境、時代の急速な変化からはじき出された人びと、復興の名のもとに見栄えよくリセットされる過去……そうしたクリアランスと糊塗の繰り返しによって、世界は次第に歪んでゆくのではないか。加速するその流れに抗うためには、〈亡所〉化に抵抗した人びとの声に耳を傾け、失われた日常を現代に回復する必要がある。本講義では、日本列島を中心とする東アジア地域をフィールドに、前近代から現在に至るさまざまな〈亡所〉を照射してゆく。そして、歴史から得られる知を倫理へ昇華する方法、実践のあり方を模索してゆくことにしたい。

教育学部09211402

大塚 類「臨床教育現象学概論」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ） S1+S2 木5 オンライン

臨床現象学では、私たちが日常生活において体験するさまざまな出来事を「事例」として、現象学や哲学の観点から考察することを試みます。事例に基づく質的研究の一種だと言えるでしょう。

本講義では毎回、若者・家族・教育にまつわる個別具体的な事例を取り上げます。講義者が体験したり見聞きしたりした出来事だけではなく、マンガ、エッセイなども事例として取り上げる予定です（参考資料参照）。人間の普遍的な経験構造を明らかにしようとする学問である現象学には、「個別は普遍に通じる」という言葉があります。個別具体的な事例を深く考察できれば、「私にも思い当たる節がある」、「そういうこともありうるかもしれない」という形で、普遍的な人間理解へと繋げられるはずです。受講者のみなさんが、自分事として当事者性をもって臨めるような身近なトピックを、深く考察することを通して、みなさんの物事を見る観点や、自己／他者理解が深まることを目指します。

医学部02218

教授・准教授・助教 赤林朗、瀧本禎之、中澤栄輔「生命・医療倫理I」 A2 金1/2 医学部三号館 S101

本講義では、保健・医療の分野においてしばしば生じる意思決定が困難な問題を、主に倫理的側面から検討する。授業では、医療倫理学の基礎理論を講義するだけでなく、具体的なケースを用いたディスカッションも行うため、受講者の積極的な参加が望まれる。

本講義は、将来に臨床や医療政策に携わる人にとって有益であるのはもちろんだが、それ以

外の人にとっても、いろいろな立場の人との議論を通じて、自分の倫理的思考を見つめ直すよい機会となる。

医学部02246

講師・助教 佐藤伊織、キタ幸子、副島堯史「家族と健康」 A1 月1/2 医学部三号館1F N101講義室

健康総合科学の対象としての、家族と健康の考え方の基礎を学ぶ。家族は社会を構成する最小単位であり、また、家族は一単位として健康総合科学実践の対象となる。国内外の、家族心理学・家族看護学・家族療法などにおける知見および理論を学び、さらに事例を通して、その実践の試みについての見識を深める。加えて、家族を健康総合科学研究の対象とする際に必要な基礎的知識と考え方を理解する。

農学部060500021

教授 芳賀 猛「生命倫理」 1単位 S1 月5 オンライン

ヒトはヒト以外の生命を喰うことによってしか生きられないという人間中心主義的な宿命を負う。一方、人間社会の利益、科学技術の進歩、ヒトとヒト以外の生き物との間での命の価値の違いなど様々な理由でヒトや動物の命の扱い方が異なっている。人の社会と人の生命における倫理問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな生命の関わり方を取り上げる。それらを様々な角度から実例をもとに聴講し、農における生命倫理として多層な生命をどう秩序立てて理解し、人類の福祉を追究すればよいかを、自身の専門分野とは異なる立場からの情報も取り入れて、これまでとは違う発想、価値観、文化、思想などについて考える機会とする。

バイオテクノロジーと社会との接点の問題という性質では、A2タームの「技術倫理」と関連する。

農学部060500031

教授 根本 圭介「技術倫理」 1単位 A2 月5

食と生活を中心に現代の科学技術と社会との接点において、価値観を伴って判断を下さなければならない、ときに相矛盾するさまざまな相互作用を多方面から学ぶ。食の安全をめぐるリスク科学の基礎、生産者・流通関係者・消費者・行政の立場からのリスク評価/リスク管理/リスクコミュニケーション、具体的な安全性評価と技術管理、コミュニケーションのあり方を考える。

教養学部08F1303

客員教授 小松 美彦「科学技術リテラシー論Ⅰ」（新型コロナウイルス感染症と生権力） 2単位 S1+S2 金4 オンライン

本シラバスを執筆している2月20日現在、第三波といわれる「新型コロナウイルス感染症」のゆくえは杳として知れない。ただし、私たちは既に“第一波”と“第二波”を経験しており、そのさい日本政府は「日本モデル」なるものによって対応した。すなわち、PCR検査の限定と行動自粛要請を通じて感染拡大の抑止を目指す、というものである。そして、新政権後の“第三波”にあっても、この「日本モデル」が貫かれているといえる。

そこで本授業では、“第一波”と“第二波”における「日本モデル」の妥当性について、「医療介護」・「リスク・コミュニケーション」・「緊急事態宣言発出」等々の側面をめぐって客観的に検証する。そしてそのうえで、「生権力」という視座から日本モデルを俯瞰的に捉えなおす。

全体としては、過去の検証をとおして、現在を考え、未来を構想することを目標とする。

教養学部08D1002

教授 廣野 喜幸「応用倫理学概論」（応用倫理学の思考法を学ぶ） 2単位 A1+A2 水5 オンライン

今日、クローン人間や動物の権利等、科学の進展と社会のあいだで解決しなければならない倫理問題が多く出現している。こうした課題にこたえるための努力が、生命倫理・環境倫理・情報倫理などの各現場から立ちあがってきた。これらの現場主義の倫理探求は応用倫理とか実践倫理とか呼ばれる。本講義は、応用倫理/実践倫理の基本的素養を身につけることを目標とする。